

Field Report



東京都渋谷区
若林歯科医院
院長 若林 健史

患者との信頼関係を築く コミュニケーションツールとして 歯科用CTを活用

歯科治療を成功へと導く鍵の1つは患者さんとの信頼関係です。特に長期的な治療や管理が必要な疾患の場合、患者さんから信頼を得ることは重要です。当院は渋谷区で開業して27年になります。カウンセリングに時間をかけ、丁寧な治療説明を心がけるなど、常に患者さんとのコミュニケーションを大切にしてきました。

2013年、同じ渋谷区内に移転したのを機に、院内のデジタル化を進め、その際に歯科用CTも導入しました。以来、歯科用CTを用いた診査・診断は患者さ

んとの信頼関係を築く上で、とても重要な役割を担うようになってきました。

例えば、デンタルやパントモは二次元の画像です。歯科医師は神経の位置や顎の内部構造を鑑みて、二次元の画像から歯根の形態などの立体的なイメージを予測します。しかし、同じことを患者さんに望むことはできません。

一方、CT画像は三次元ですから、医学の知識を持ち合わせていなくても立体的な構造を把握することが可能です。それは病変や骨吸収量などの骨の状態に対する理解度をより深め、治療に対

する安心感を与えるものとなります。この患者さんが得る「理解」や「安心」は医院への信頼に大きく影響するものだと考えています。

歯科用CTを用いる症例としては、インプラント治療がよく知られています。当院においても、インプラント埋入部の骨の状態を事前に把握するなど、より高い安全性を担保するためにCT画像による診断を行っています。

そのほか、歯周病治療の際には歯槽骨の欠損の状態を把握しながら、よりの確なSRPなどの歯周基本治療を進め

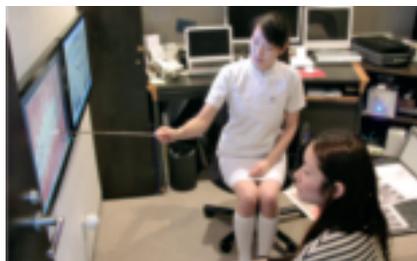


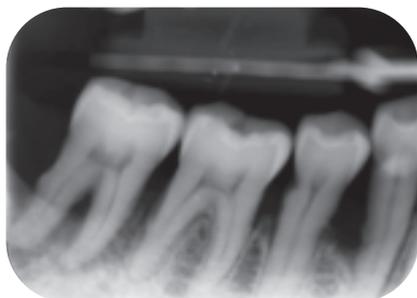
図1 当医院では歯科衛生士もCT画像を使用し患者さんに指導を行っている。



図2 iPadを使用した診療前の打ち合わせ風景。院内をデジタル化したことで、スタッフ間のコミュニケーションもスムーズに。



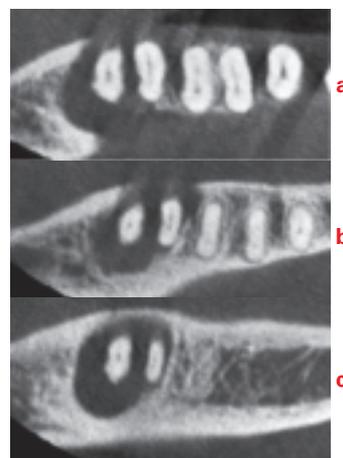
症例1-1 #47は一見問題なさそうに見えるが頬側部から遠心部にかけて10mm以上の歯周ポケットが存在する。



症例1-2 同部位のデンタルX線写真では遠心根の周囲の骨が吸収していると想像できる。



症例1-3 さらにCT撮影を行い赤線方向にスライスして骨吸収の状態を確認する。



症例1-4 歯頸部は頬側、舌側の皮質骨が吸収しており根尖付近にかけては海綿骨が吸収している。

たり、外科的な治療が必要か否かの判断および手術法の選択材料としても活用しています。また、根管治療の際には根尖病巣を的確に診断するために歯科用CTは有効です。従来のX線装置では抜歯の判断をせざるを得ない、あるいは病変を見逃してしまう、そうした症例であっても三次元的に診断することで抜歯をせずに済んだり、精度が高い治療を行うことができるなど、歯科用CTがもたらす恩恵は計り知れません。

こうした診断能力の向上には画質のクオリティが重要になります。エナメル質や象牙質、神経などがしっかりと判別できるか、小さな病変でも捉えることができるか、ベラビューエポックス 3Dfの画質はそうした課題にもしっかりと応えてくれるクオリティだと感じています。

また、本体がコンパクトなため、当院のようにスペースの確保が難しい医院でも導入しやすい点は助かりました。



操作性においても、説明書を読み込まなくてもある程度の操作が可能など簡便です。位置づけについても撮影したい領域の指定がスムーズに行え、撮影者の技量に関わらず希望通りの撮影が行えるのも気に入っています。

当院では院内のデジタル化の際にiPadの導入も行いました。歯科用CTで撮影した画像を取り込み、チェアサイドやカウンセリングルームで患者さんにお見せしたり、患者プレゼンテーション

用ソフトと併用して治療説明を行うなど、院内のデジタル化により患者さんとのコミュニケーションの幅が広がりました。歯科用CTはデジタルデータの活用という点においても大変重宝しています。

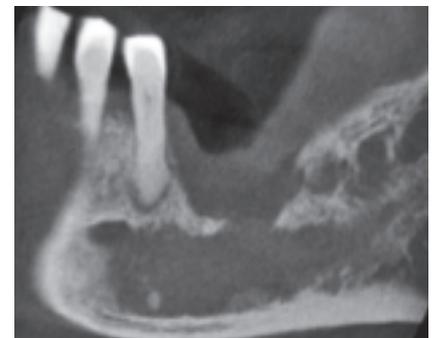
今後、歯科用CTの普及はますます進むものと思います。そうした中、患者さんの信頼を獲得するうえで、よりクオリティが高く、使い勝手のよい機種を選択することが重要だと感じています。



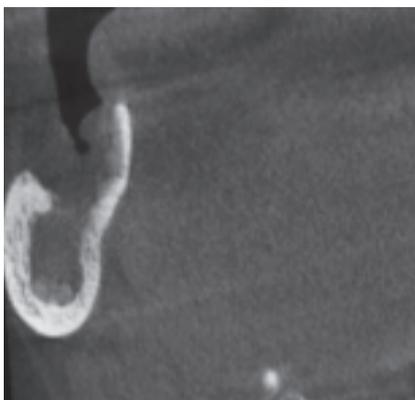
症例2-1 70歳女性、#36の疼痛が主訴で来院。



症例2-2 デンタルX線写真で歯根肥大と遠心部の骨欠損が確認できる。



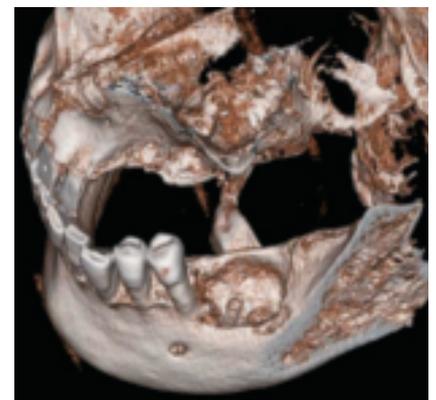
症例2-3 保存不可能と診断し抜歯したが下顎管まで到達する骨欠損が確認できる。



症例2-4 遠心方向からのCT画像ではさらに海綿骨の希薄さが確認できる。



症例2-5 咬合面方向からのCT画像では抜歯窩の骨欠損が確認できる。



症例2-6 3Dによる立体画像は患者さんに骨吸収量を理解していただくために有効である。